



地域医療の現場から

地域医療とは何か — 35年の軌跡 —

兵庫県のほぼ中央に位置する多可町。人口は約1万9千人、高齢化率38.4%。農業が盛んで、自然に囲まれた町北部の加美区に杉原谷診療所があります。同診療所長の戸田忠一先生は地元出身。35年にわたって住民に寄り添いながら地域医療を支えてきた取組や思い、今後の展望について聞きました。

多可町立杉原谷診療所
所長 戸田 忠一 先生



地域医療のきっかけ

「タイミングもあったし、熱い声掛けもあった。地元へ戻ってもいいなと思って。」

三木市民病院で働く傍ら、神戸大学循環器科の学位もひと段落ついたタイミングで、親の年齢を考慮し、当時の町長をはじめとする故郷からの熱心な声掛けもあり、休診状態となっていた診療所を再開することを決意しました。これが地元の地域医療を支える第一歩となりました。

患者に寄り添う診療

週に5日（火曜・日曜除く）の診療を行っています。1日平均約20名の患者が来院しており、地域医療の要です。着任当初は小児科も兼務していましたが、現在は内科、特に循環器を専門とし、診療がない時には超音波などの検査を行ったり、訪問診療に出向いたりしています。また、小学校の学校医として100人規模の診察を行ったり、現在は電子カルテ開始に向けた準備が繁忙なため停止していますが、県立丹波医療センターから研修医、その他養成医も含め、年間約6人を受け入れたりと、幅広い地域医療に従事しています。

診療所のスタッフは、事務長1名、看護師2名、事務職員2名。訪問診療は先生を中心にチームで対応しており、現在3名の患者について、症状に応じて計画的に対応しています。入院が必要な場合は、積極的に地域包括ケア病棟を運営する多可赤十字病院や、緩和ケア病棟がある県立丹波医療センターへ紹介しています。「病院での最後もあるし、私が往診するという方法も、ご本人や家族様から希望があれば断りません。」と患者本人や家族に寄り添い、在宅医療を続けています。

患者との信頼を築く診療の姿勢

「治療は患者さん自身がリスクを減らすために行うもの」

診療所の患者の多くは75歳以上の高齢者で、生活習慣病や循環器疾患を抱えています。近年では外国籍の患者も増え、翻訳アプリを活用した診療も行われています。

先生は診療の姿勢について、「患者さんが納得して治療に取り組むことが大切。だからあんまり「来ないとあかんよ。」という言い方はしないです。患者さんに、血圧降下薬をずっと飲まないといけないのかとよく聞かれるんですが、「辞めてもいいけど、辞めることで

脳梗塞や脳出血のリスクは高くなります。どう考えますか？」と患者さんに聞き返すんです。」と患者自身が治療の意義を理解し、自ら続ける意思を持つことが重要だと語ります。

また、先生は治療開始時にしっかりと説明することを心掛けています。「説明せずに治療を進めようと、後で脳梗塞を発症してから来院する患者さんもいます。治療したからと言って絶対に発症を防げるわけではありませんが、リスクを減らすことはできます。だから、最初の段階でしっかりと説明することが非常に大事だと考えています。」

35年を振り返って

数々の変化と試練、そして感慨深い瞬間がありました。その中で特に印象的だったエピソードを3つ教えていただきました。

1 救急医療の進化

着任当時、救急医療の環境は非常に厳しく、病院に患者を搬送しようとしても受け入れてもらえないことが日常茶飯事だったといいます。特に肺炎の患者を救急搬送しようとした際、「あと3日したら受け入れ可能かもしれない。」と断られた経験は、今も鮮明に記憶に残っているそうです。

現在は、診療所に救急車が5～6分で到着し、県立丹波医療センターや市立西脇病院など、状況に応じた受け入れ先への迅速な搬送体制が整備されています。また、近隣の小学校の校庭が地域の努力で芝生化されたことで、ドクターヘリの運用も向上し、外傷患者を加古川まで約20分で搬送できるようになりました。

2 患者との絆

「患者さんが良くなったときや感謝の言葉をいただいたとき、胸が熱くなります。時には子どもの頃に診てもらっていたと来院される患者さんもいます。」成長した姿に驚きつつも、感慨深い気持ちになったと語られるエピソードからは、長い年月で築かれる患者との繋がりが、地域医療の魅力の一つだと感じられます。

3 若い頃の教訓

「昔の話ですが、血圧手帳を持参するよう患者さんをお願いしても一向に持ってこない方がいました。その方を懇々と諭していたら、『先生に怒られた!』と診察室から飛び出して行ってしまったんです。」と笑いながら振り返る先生。「伝え方も含め、あの頃の至らない部分だったなと今は反省しています。」と語る姿に、医師として奮闘し、成長されてきた年月が感じられます。



戸田所長（右から3人目）と多可町立杉原谷診療所の皆さん



杉原谷診療所



診療所待合室



診療所内風景

進化する医療へ対応し続けるために

「昔は「勘の世界」と言われていた医療も、今ではガイドラインに基づく診療が求められる時代です。そのためには、変化を正確に理解し、最新の事実を知っている必要があります。」かつて使用が避けられていた薬が治療の必須薬となったり、CT等造影機器が進化したり、医療は刻々と変わってきたと先生は語ります。

「経験もちろん大切ですが、新しい知識を吸収し続けることを常に意識しながら診療に臨んでいます。」と語り、学びを止めないことが患者に提供できる医療の質を向上させるための原動力であると強調します。

地域にとって杉原谷診療所とは

診療所は、単に医療を提供する場にとどまらず、地域住民にとって安心と信頼の拠点として役割を果たしています。地域では、高齢者が多く、交通手段が限られるため、通院自体が大きな負担となることもあり、先生は「診療所が今後も継続し、地域住民の健康を支え続けてほしい。」と願いを語ります。

診療所の事務長は、「先生に疾患を見つけてもらったという話はよく聞きます。先生の名前を聞いて遠方から来られる方も少なくありません。高齢の患者さんは、先生にしっかり話を聞いてもらったと、安心して帰られます。先生も診療所も地域にとって欠かせない存在です。」と先生が地域にもたらしてきた功績について語ります。



診療風景

多可町職員も、「診療所は地域医療になくてはならない存在であり、地域の医療を支えている重要な拠点です。患者さんの中には「先生に診てもらったために、血圧をきちんと記録するようになった。」と話す方もいます。」と言い、その信頼の深さがうかがえます。

地域医療で働く魅力と今後の展望

「地域医療は働きがいのある仕事だと思います。診療所のような勤務医の立場では、経営や人事の心配をせず医療に専念できます。それが一番の魅力ではないでしょうか。」と先生は話します。ここは医師の学びを支える環境にも優れており、学会への参加が容易であるそうです。「もし技術的に不安があれば、町の病院に協力を仰いで研修を行うこともできます。例えば、消化器専門の医師なら胃カメラなどの技術についてのサポートを受けられる環境が整っています。」多可町職員も、「医師の技術向上が地域住民への医療の質向上につながる。」と考えており、積極的に支援する姿勢を示しています。

さらに、先生は地域医療の現場でもインターネットの普及により、情報格差が大きく縮まっていると指摘します。「やる気さえあれば、どこにいても学び続けられる時代です。分からないことがあれば調べる習慣を持つことが大切です。」診療所での医療は、患者一人ひとりのために、最適な治療を考える必要があります、そうした姿勢が地域住民の安心に繋がっています。

地域医療の現場は、医師としての技術を磨きながら、患者との信頼関係を築くという貴重な経験を提供してくれます。先生は、「これからも、次世代の医師た



多可町役場



芝生化した小学校の校庭

ちが情熱をもって、診療所で働いてくれることを期待しています。」と語ります。

杉原谷診療所は、長きに渡り、地域住民に寄り添い、その健康を守り続けてきました。患者一人ひとりの声に耳を傾け、地域に根差した医療を提供し続けてきたことは、多くの住民に安心と信頼を与え続けてきました。しかし、医師不足や診療所の未来には課題もあり、今後も医師の確保や育成が重要となります。地域医療の充実には医師一人の努力だけではなく、地域全体の協力が不可欠です。「地域医療とは何か」を体現する35年の軌跡は、地域医療の可能性と希望を示しており、それを次世代へと引き継ぐことが、今後の地域医療を支える原動力となることでしょう。

本協議会ホームページ
掲載ページはこちら



「多可町立杉原谷診療所」の
医師求人情報内に掲載中